

否定関連現象から見た日本語とスペイン語

片岡喜代子 (九州大学)

【キーワード】 否定、統語構造、普遍性、個別特質、スコープ

0. 導入：対照研究

世界には様々な言語があり、様々な相違を見せている。一見似ているようでも実は相違が大きい場合もあれば、全く異なるように見えても、実は共通点が多い場合もある。本稿は後者を探る試みである。表層的に感じられる相違故に大きく異なっていると思われている言語間にも実は共通する事項は多い。人間の言語であれば共通点があっても当たり前であり、特に普遍性の高い概念や事象に関する言語現象であれば、なんらかの共通の要因が働いているのは理にかなっている。それが一見異なる言語間において確認できれば尚更興味深いことであるが、それは共通の枠組み、つまりより一般的な言語理論で捉えてこそ可能である。同じ土俵でなければ本当の意味での力比べはできないのである。

本研究では普遍的カテゴリーと見なされている否定 (Horn 1989) を取り上げ、複数の言語における否定に関する言語現象を通して、言語間に見られる表層的な相違は、幾つかの普遍的原理と個別言語における語彙的・構造的な特質で捉えられることを示す。以下では特に、日本語とスペイン語における否定を要求する項目 (Neg(ation)-sensitive element (NSE)) の分布やふるまいに着目する。NSEも様々な言語で観察され、その分布やふるまいが盛んに議論され、普遍的原則による統一的説明も試みられている (Klima 1964, Haegeman 1995)。しかしながら、それらの普遍的原則に従わない項目も多く確認され、言語によってその相違の現れ方も多様である。本稿では、共通の枠組みで捉えることで、それらの表層の相違も含めて、どの部分・レベルでの相違がどのように現れているのかを明らかにする。類型論的には相違が多いと見なされている両言語においても、NSEが関る現象が、否定に関する普遍的原理と個別の構造・語彙的特質から導かれることを示し、更に否定における普遍的特質という観点から両言語の否定現象がどのように捉えられるかを記述し論じていく。

1. 説明理論の枠組みと道具立て

本研究は、すべて人間は言語を司る能力を有しており、その普遍的言語機能故に、共通する言語構造構築のメカニズムを持つという、生成文法理論の仮説に基づいた言語理論を拠り所とする。まずその共通の枠組みで日本語とスペイン語がどのように捉えられるかを見る。

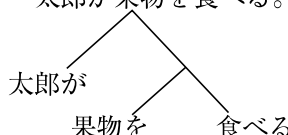
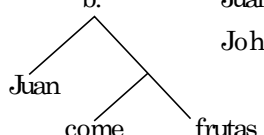
1.1. 統語構造における普遍性

日本語の「ろくな～」のような表現は否定辞を要求し、否定なくしては生起不可能である。従って、両者にはなんらかの結びつきが認められる。

- (1) 不景気だからもう少しいい学生が来ると期待したが、ろくな学生が面接を受けに来
なかった / *来た。

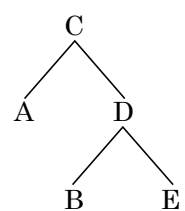
しかしながらその結びつきは線的な隣接関係で語れるものではないことはこの例から明らかである。このような現象を説明するべく仮定されたのが、目には見えない結びつきを表す統語構造であり、その構造に基づくスコープという概念である。

統語構造 (LF) は、二股枝別れ (binary branching) の階層構造を成すと仮定される。二つの要素が一緒になってより大きな句を一つ作り、さらにまたその句が他の要素と一緒にしてより大きな句を作る、という言わば段階的な構造構築が仮定される。この構造構築の特質は言語機能故に現れる普遍的特質である。例えば(2)のように表され、便宜上 [] を用いることが多い。本稿でも紙幅の都合上 [] を用いて(3)のように示す。

- (2) a. 太郎が果物を食べる。

b. Juan come frutas.
 John eats fruits


- (3) a. [太郎が [果物を 食べる]] b. [Juan [come frutas.]]

各要素間の構造関係は c- 統御 (c-command) という概念で表され、この統語関係が解釈基盤となる。否定辞と「ろくな～」のような隣接しない要素間の関係を捉えるために導入された概念の一つがスコープである。スコープは c- 統御により(5)のように定義される。

- (4) a. A c-commands B iff (iff = if and only if)
 b.  c. [c A [d B E]]
 (i) A c-commands D, B and E
 (ii) B c-commands E
 (iii) A does not c-command C, B does not c-command A, ..
 (Reinhart 1976, 1983)

- (5) ある要素 A の LF における c- 統御領域が A のスコープである。(Reinhart 1976, 1983)
 (i) LF [... A [...]]

つまりある要素 B がある要素 A の c- 統御領域にあれば、B は A のスコープ内にあり、それが解釈に反映されていると捉えるのである。以下では、否定現象を通して、これら構造上の

普遍的特質が、各言語個別の構造的・語彙的特質と相俟って、どのように表層の相違を生み、それらがどう捉えられるかを見る。

1.2. 統語構造における個別特質と語彙特質

普遍的な階層構造という共通の枠組みで見ると、日本語とスペイン語の相違は以下のように捉えられる。

(2) a, b で示したが、[果物を食べる] に対して [come frutas] が対応するように、両言語では動詞句 (Verb Phrase (VP)) において動詞が先行するか後行するかが異なる。更に、日本語における名詞句 (Noun Phrase (NP))、修飾節 (CP) 付きの名詞句 (NP)、後置詞句 (Postpositional Phrase (PP)) と、それに対応するスペイン語の名詞句、修飾節付きの名詞句、前置詞句 (Prepositional Phrase (PP)) において、それぞれの句でその句全体の働きを決める要素 (主要部 (head) と呼ばれる) が、先行するか後行するかが決まっていることが確認できる。これを構造上で捉えたと、二つの要素が組み合わさって、より大きな句を成す際に、先行要素か後行要素のいずれがその句の働きを決める役割をするかが、言語によって決まっているということになる。

- (6) (i) 日本語 : [[...] [A]]
- a. [VP [果物を] [v 食べる]]
 - b. [NP [おいしい] [N りんご]]
 - c. [NP [CP 青森から来た] [N りんご]]
 - d. [PP [青森] [P-から]]
- (ii) スペイン語 (英語) : [[A] [...]]
- a. [VP [v come] [frutas]] 'eat fruits'
 - b. [NP [N manzanas] [ricas]] 'delicious apples'
 - c. [NP [N manzanas] [CP que vienen de Aomori]]
'apples that came from Aomori'
 - d. [PP [P de] [Aomori]] 'from Aomori'

主要部が常に他の要素に後続する日本語は、主要部末尾型 (head-final) と言われ、主要部が常に先行するスペイン語は主要部先頭型 (head-initial) と言われている。

- (7) 主要部末尾型 (head-final) と主要部先頭型 (head-initial)
- a. 主要部末尾型の日本語 : [[...] [A]]
 - b. 主要部先頭型のスペイン語・英語 : [[A] [...]]

このように共通の理論的枠組みにより、表層上の違いが主要部の位置による違いとして統一的に捉えることが可能になる。

では、この共通の枠組みで否定文はどのように捉えられるであろうか。日本語の文否定辞「-ない」が述語につく接辞であるのに対し、スペイン語は英語等と同様副詞的要素 *no* が文

否定を成す。

- (8) a. 太郎がりんごを食べない。
 b. No come frutas Juan.
 Not eat-3rd-sg fruits Juan
 'John does not eat fruits.'

ある文が否定命題を表すというのは、ある意味でその文（命題）の特質・働きと考えられる。その否定文の特質を決める否定辞がその主要部であると考えれば、(6)で見た違いと同様に、主要部である否定辞が末尾にあるか先頭にあるかの違いとして捉えられる。（関連議論は Klima 1964, Chomsky 1975, Bosque 1980, Takubo 1985, Kato 1985, Pollock 1989, Laka 1990, Zagana 2002, 片岡2006等を参照されたい。）

- (9) a. [[VP 太郎がりんごを食べ]-ない]
 b. [No [VP come frutas Juan]]
 Not eat-3rd-sg fruits Juan

さらに、(5)のようにある要素 A の c- 統御領域がそのスコープであるとする、それぞれ否定のスコープは、命題 (VP) ということになり、否定要素が文（命題）全体をスコープに取るのが文否定であると、直感的にも理にかなう捉え方となる。共通する枠組みによる階層構造とそれにおけるある要素の位置、他の要素との統語的關係を捉えることで、異なる言語の現象を、言わば同じ土俵で捉えることができる。否定を導くという意味的働きは同じでも、否定辞の範疇が異なることで相違が大きいと思われる両言語の現象にも、共通の要因が働いているのである。

2. 普遍的現象としての否定と否定を要求する項目

2.1. 否定のスコープにおける生起

否定は普遍的カテゴリーであるとされているが (Horn 1989)、否定を要求する項目（以下 NSE と呼ぶ）も一般によく見られる現象である。例えば、語用論的に導入されるスケールの最低点（極点）に言及して否定とともに全称否定を導く表現 ((10)) や、スケールは導かないが否定とともに全称否定を導く不定表現 ((11))、否定対象にすることで直接表現を避ける緩和表現 ((12))、否定とともに除外を表す表現 ((13)) 等、日本語とスペイン語において（また英語においても）対応する表現は数多く見られる。

- (10) a. 太郎はあいつのために指一本動かさなかった。
 b. No movió un dedo por él. (NGLE 48.7d-g)
 not moved-3rd-sg a finger for him.

- 'He did not lift a finger for him' (--> He did nothing.)
- (11) a. 誰も来なかった。
 b. No vino nadie.
 not came-3rd-sg anybody 'Nobody came.'
- (12) a. ろくなことではない/大したことではない。
 b. No vale gran cosa. (Bosque (1980: 1, 1.1, (14a))
 not have-3rd-sg:value big thing 'It is not very good.'
- (13) a. 3時にしか来なかった。
 b. No vino hasta las tres.
 not came-3rd-sg till three 'He did not come until three o'clock.'

これらの項目を、統語構造における否定辞との関係という観点から見ると、以下のように、否定辞のスコープ内における生起という共通の特徴が見えてくることが確認される。

- (14) a. 太郎は [あいつのために指一本動かさ] なかった。
 b. [誰も来な] かった。
 c. [ろくなことでは] ない / [大したことでは] ない。
 d. [3時にしか来] なかった。
- (15) a. No [movió un dedo por él.]
 not moved-3rd-sg a finger for him.
 'He did not lift a finger for him' (→ He did nothing.)
 b. No [vino nadie.]
 not came-3rd-sg anybody 'Nobody came.'
 c. No [vale gran cosa.]
 not have-3rd-sg:value big thing 'It is not very good.'
 d. No [vino hasta las tres.]
 not came-3rd-sg till three 'He did not come until three o'clock.'

更に、はじめに挙げた(1)の例も以下のような構造で、否定要素のスコープ内における「ろくな～」の生起という、同様の捉え方ができる。

- (16) [[ろくな学生が試験を受けに来] なかった]

2.2. 従来の分析

実際のところ、否定環境を要求するNSEは、英語の(18)等を根拠として、(17)に従うと一般に認められており (Klima 1964)、逆にNSEの分布を調べることで否定 (Neg) のスコープが確認できるとも考えられている。

- (17) Neg-c- 統御条件:

NSEはLFにおいてNegにc-統御されなければならない。

- (18) a. He didn't_i [_{VP} invite anybody.]
 b. *Anybody didn't_i [_{VP} invite him.]¹

つまり、日本語、スペイン語も含め一般に、NSEはBにはなれるがAにはなれないということが認められてきている。

- (19) a. [... A ... [[... B ...] Neg(-nai)]]
 b. [... A ... [Neg(not/no) [... B ...]]]

Neg-c-統御条件はNSEの生起にとって、否定や否定のスコープに関する普遍的原則の一つとして、認められて来たのである。

3. NSE への更なる統語的考察

3.1. 否定のスコープに入らない統語的位置

前節のように従来の統語的構造分析と Neg-c-統御という一般的条件で、両言語におけるNSEの分布は捉えられるように見えるが、実は詳細に統語的ふるまいを見ると、更なる違いが共通の枠組みで捉えられる。そして、両言語のより大きな意味での類型論的違いが現れていることが確認できる。

文否定は普遍的に文（命題）全体をその統語的スコープにとるとしたが、実は日本語においてもスペイン語においても、否定のスコープに入らない要素も存在し得る。日本語では、かき混ぜ文 (*scrambling construction*) と呼ばれる、目的語 - 主語 - 動詞語順文において、前置目的語が否定のスコープに入らない場合があることが確認されている（片岡2006: 3）。

- (20) りんごを 太郎が 食べない。
 a. [りんごを [[_{VP} 太郎が 食べ]- ない]]
 b. [[_{VP} 太郎が りんごを 食べ]- ない] (= (9a))

かき混ぜ文は解釈レベルの構造 (LF) において、前置目的語がそのままの位置を占める構造 (20 a) と、(9) a の基本語順文の目的語位置で解釈される構造の二種類が可能であると認められている (Ueyama 1998, Saito 2003等)。この前者の構造で解釈された場合の目的語は(20) a のように否定のスコープに入ることが不可能である (片岡2006: 3)。

スペイン語でも実は否定のスコープに入らない位置が存在する。それは動詞に前置する位

1 例文に付けられている*は、当該の文が問題になっている解釈のもと容認不可能であることを示す。

置であり、従来は主題位置と見なされている(Zagana 2002, 片岡2010b)。

- (21) Juan no come frutas.
 John not eat 3rd-sg fruits. 'John does not eat fruits.'
 a. [Juan [no [come frutas]]]

従って、否定の統語的スコープは、それぞれ以下のように仮定される。

- (22) 否定の統語的スコープ
 a. 日本語: (i) [[VP NP-ga NP-o/ni V] Neg(-nai)]
 (ii) [a_{obj} [[VP ... V] Neg(-nai)]] (a は前置目的語)
 b. スペイン語: (i) [[Neg (no)] [VP]]
 (ii) [β_{topic} [[Neg (no)] [VP]]] (β は主題化された要素)

否定の統語的スコープ(つまりe-統御領域)の外にあることが確実な、これらの統語的位置を用いることによって、NSEの統語的ふるまいを更に詳しく調べることが可能になる。日本語において(i)だけが仮定されてきた従来の分析でも、(14)のようにNSEの分布はNeg-c-統御条件という一般的な原則で説明可能ではあったが、それは可能な分析の一つに過ぎない。Neg-c-統御条件が満たされない位置には生起できないことが示されて始めて、Neg-c-統御条件が働いていると断定できるのであり、この(22) a ii の前置目的語位置がそのような位置である。この位置を用いて調べてみると、これまで一律に扱われてきたNSEが統語的には二つのタイプに区分すべきであり、その区分はNSEの意味特質と密接に関連していることが明らかになった(片岡2006, 2010a)。

3.2. 二つのタイプのNSE

(22)で示した否定のスコープに入らない構造上の位置を用いると、日本語のNSEもスペイン語のNSEも、Neg-c-統御条件に従うか否かという点において統語的には二つのタイプに分けられる。またその区分によって説明できなかった現象を捉えることが可能になる。

3.2.1. 日本語NSE

日本語では(22)で示したように、前置目的語が否定の領域に入れられない場合があり、幾つかの方法で、その構造で解釈されることを強要することが可能である。その一つが再述要素(resumption)を用いる方法である(詳細は片岡(2006: 3)を参照されたい)。

- (22) a. 日本語: (ii) [a_{obj} [[VP ... V] Neg(-nai)]] (a は前置目的語)
 (23) [りんごを [[VP 太郎がそれを 食べ] - ない]]

つまり、かき混ぜ文において再述要素が現れた場合、その前置目的語は否定の領域外を占めることになり、否定のスコープには入れない。この再述要素とNSEの共起を調べてみると、

以下のように可能な項目と不可能な項目があることが確認できる。

- (24) a. ドン・キホーテしか 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)
 b. スペインの小説をなにも 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)
 c. スペインの小説を一冊も 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)
 d. *スペインの小説一冊 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)
 e. *ろくな小説を 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)

「ドン・キホーテしか」や「～なにも」は否定の領域外にも生起可能で、Neg-c- 統御を必要条件としないということがわかる。一方、「スペインの小説一冊」や「ろくな～」は否定の領域外には生起不可能で、Neg-c- 統御が必要条件と考えられる。つまり、統語的には二つのタイプに分かれるのである。

3.2.2. スペイン語 NSE

スペイン語 NSE には、動詞に前置される項目がある。

- (25) a. No vino nadie.
 not came-3rd-sg anybody 'Nobody came.'
 b. Nadie vino. 'Nobody came.' (Bosque (1980: C. 2), (1), (2))
- (26) a. No he estado aquí en {mi/la} vida.
 not have-1st-sg been here in my/the life 'I have never been here in my life.'
 b. En {mi/la vida} he estado aquí.
 'I have never been here in my life.'
 (Bosque (1980: C. 2), (27b), (28b))

これらの項目は、前置されると否定辞 *no* は共起できず、*no* なしで同じ意味解釈を与えるとされている。一方前置は可能であるが、否定辞 *no* が共起する項目もある。

- (27) a. No iré hasta las tres.
 not will-go-1st-sg till three 'He did not come until three o'clock'
 b. Hasta las tres *(no) iré. (Bosque (1980: C. 2, 2.2), (36), (37))
- (28) a. No ha llegado todavía.
 not have-3rd-sg:arrived yet 'He has not come yet.'
 b. Todavía *(no) ha llegado. (NGLE: 48.8ñ)

これらの項目が占める動詞に前置する位置が主題位置と同じとすると、これらは否定の領域外である(22) b-ii の位置を占めていると考えられる。

- (22) b. スペイン語：(ii) [β _{topic} [[Neg (no)] [VP ...]]] (β は主題化された要素)

否定辞がなぜ省略されるか、抽象的否定要素が存在するかどうか、或いは前置されたNSEが否定の意味を担うと考えるべきか等については別の機会に議論を行いたいが (Zagona 2004, 片岡準備中を参照されたい)、これらが否定の領域内に存在しなくてもいいのは明らかであろう。

更に着目したいのは、同様の前置が不可能なNSEが存在することである。

- (29) a. No movió un dedo por él.
not moved-3rd-sg a finger for him.
'He did not lift a finger for him' (→ He did nothing.)
b. *Un dedo movió por él. (NGLE: 48.7d-g)
- (30) a. *(No) vale gran cosa. (Bosque (1980: 1, 1.1, (14a))
*(not) have-3rd-sg:value big thing 'It is not a great thing.'
b. *Gran cosa vale. (NGLE: 48.7g)

これらは否定の領域外である前置位置に生起不可能で、従って否定のスコープに生起するために Neg-c- 統御が必須条件であると捉えられる (片岡 2010b を参照されたい)。

3.3. NSE の意味特質と否定のスコープ

日本語でもスペイン語でも NSE の統語的条件は一律ではなく、普遍的原則と見なされていた Neg-c- 統御条件に従う項目と従わない項目の少なくとも二つに区分されることが確認された。この統語的区分は実は NSE の意味特性と密接に関連している。

再度以下の例を見られたい。

- (24) a. ドン・キホーテしか 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)
b. スペインの小説をなにも 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)
c. スペインの小説を一冊も 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)
d. *スペインの小説一冊 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)
e. *ろくな小説を 花子が それを 夏休みに読まなかった (ので ...)

(24) d の「スペインの小説一冊」はスケールの極点を示すことで結果的には全称否定を導く。Fauconnier 1975 や Ladusaw 1979 が捉えた本来の否定極性 (スケール解釈 + 全称否定) を備えた項目である。その分析通り否定極性を全うするためには否定のスコープになければならず、従って否定の領域外には生起できない。(24) e の「ろくな～」は否定の焦点になる項目でそのために否定のスコープになければならず (Takubo 1985)、やはり否定の領域外には生起できない。一方 (24) a の「～しか」は否定述語をその領域に取る項目であり、(24) b, c の「～も」は全称量化力をもつ故に全称否定を導くためには否定のスコープ内には生起できない。否定のスコープ内で否定されると部分否定になってしまうからである。このように各項目の統語的位置と意味解釈は対応しているのである。(片岡 2006, 2007, 2009, 2010a)

スペイン語 NSE にも同様の対応が見られる。(29) はスケール解釈と全称否定を導く純粋な

否定極性項目と見なされ、故に否定の領域外には生起できない。(30)は「ろくな～」と同様に否定の焦点として解釈される故に否定のスコープ内に生起しなければならない。一方、スケールや焦点が関らない項目 (25), (26), (27), (28) は否定の領域外に生起可能である (これらの項目の意味特質についての詳細は片岡2010a 及び片岡 準備中を参照されたい)。

4. 否定環境を作る表現

この節では、両言語の特徴的な否定現象を紹介しておきたい。前節で、本来の否定極性を持つ項目は、否定のスコープ内での生起が必要で、そのためには統語的に Neg による c- 統御が必須であることを見たが、その否定極性項目の生起を許す環境としての否定のスコープにおいて、日本語とスペイン語ではかなり相違が見られる。スペイン語では、否定辞以外にも否定のスコープのような領域を作る要素があり、その要素の c- 統御領域内であれば否定極性項目の生起が可能である。一方日本語では、否定極性項目が生起可能なスコープを成すのは明示的否定辞だけである。これらも広い意味での否定的要素の統語的領域で捉えたスコープ現象として位置づけることが可能であり、共通の統語構造を仮定することで、ある要素のスコープ内におけるある特別な要素の生起というより普遍的な要因で両言語を対照させることができる。

4.1. 否定的意味を想起させる要素

Ladusaw 1979 は NSE の分布を網羅的に記述し、その生起条件を否定辞の統語的領域での生起ではなく、否定的意味環境における生起として統一的に分析している。その英語の NSE の記述によれば、否定極性項目は明示的否定辞がなくても、否定的な意味環境が確立すれば生起が許される。つまり以下の B として NSE が生起可能である。

- (31) [Negative-A [... B ...]] / [[... B ...] Negative-A]

それは例えば、deny や doubt 等の否定的述語や only や比較表現等の除外要素等である。

スペイン語にもそのような項目があり、以下のように、動詞、形容詞、接続詞等統語的範疇には関らず、その統語的領域が否定のスコープと同様の働きを担うことを許し、否定極性項目の生起を許す。しかしながら、Neg-c- 統御条件が必要条件でない否定不定語等は、その環境には生起できない。その点からも NSE の生起条件が一律ではないことが明らかである。

- (32) a. Solo él movería un dedo por ti. cf. *Solo él haría nada por ti. (NGLE: 48.6k)
 only he would:move-3rd-sg a finger for you **only he would do anything** for you
 'Only he would move a finger for you.'
 b. Si hubiera posibilidad alguna, (NGLE: 48.6e)
if there would:be possibility any, ...
 'If there were any possibility, ...'

- c. Si tuvieras una pizza de vergüenza, cf. *Si dijera nada, (NGLE: 48.6e)
if would:have-2nd-sg a piece of shame if would:say-3rd-sg anything
'If you had a piece of shame, ...'
- d. Ella prefería que se muriera a mover un dedo por ayudarlo. (NGLE: 48.6r)
she would:prefer that CLI would:die to lift a finger to help him
'She would prefer that she would die to lifting a finger to help him.'
- e. Me sorprende mucho que haya movido un dedo por ella. (NGLE: 48.9f)
I:am:surprised much that would:have-3rd-sg lifted:a:finger for her
'I am surprised that he would have lifted a finger for her.'
- f. *Demasiado pronto para que llegue todavía. (NGLE: 48.8ñ)
too:much early for that would:arrive-3rd-sg yet
'It is too early for him to arrive yet.'

一方日本語では、同様の意味環境には否定極性項目のみならず、他の NSE も生起できない。唯一、不定語が反意疑問文等で許されるくらいである。

- (33) a. 花子は *何も / *りんごしか / *ろくなものを食べたことを 否定した。
b. 花子は *何も / *りんごしか / *ろくなものを食べたことを 疑った。
c. もし花子が *何も / *りんごしか / *ろくなものを 食べれば、
d. 私は、 *何も / *そのことしか / *ろくなことを 言うよりも 黙っていた方がいいと思う。
e. 私は、 食べ物何もなしで / *? 水しかなしで / ? ろくな食べ物なしで 一日過ごした。
f. そんな所、 だれも行くもんか ?

今後、否定的意味環境の特質の違いや否定極性項目そのものの特質の違い等を含めて探る必要があり、それにより否定現象の違いが更に見えてくる可能性がある。興味深い現象である。

4.2. 否定的意味を持つ接辞とそのスコープ

否定的意味を持つ要素が他の語の接辞となる場合、否定接辞の統語的領域はその付加した語だけであるが、実際は付加されて構成された語句全体が否定環境を作る要素となり、その領域が否定的意味環境を成し NSE の生起が許されることがある。

- (34) [... [**Negative-prefix** [-A]] [... B ...]] / [[... B ...] [**Negative-prefix** [-A]]]

スペイン語や英語ではその環境に NSE が生起可能であるが、日本語ではやはり不可能である。

- (35) a. Era imposible [hacer nada] / cf. *Era imposible nada. (NGLE: 48.2n)
was impossible do anything

- 'It was impossible to do anything.'
- b. Es {imposible / muy difícil} que mueva un dedo por ayudarla. (NGLE: 48.7c)
is {impossible / very difficult} that would:move-3rd-sg a finger for help her
'It is {impossible / very difficult} that he would lift a finger to help her.'
- (36) a. He will be able to find some time for that.
b. He won't be able to find any time for that.
c. *He will be able to find any time for that.
d. He is unable to find any time for that. (Klima 1964, p.291, (149))
- (37) a. It is possible for him to do more.
b. It isn't possible for him to do any more.
c. *It is possible for him to do any more.
d. It is impossible for him to do any more. (Klima 1964, p.291, (151))
- (38) a. *ろくな学生が 不合格 / 無分別 / 未履修だった。
b. *花子しか 不合格 / 無分別 / 未履修だった。
c. *だれも 不合格 / 無分別 / 未履修だった。
- (39) a. *ろくな学生が 合格するのは 不可能だ。
b. *太郎が 花子にしか 連絡するのは 不可能だ。
c. *?学生がだれも 連絡するのは 不可能だ。

否定的要素の統語的領域という枠組みで見ると、これら否定関連現象が、統語的スコープの特質の違い及びNSEの違いとして共通の土俵で捉えられる。

5. 統語的観点から見たその他の否定関連現象

スペイン語と日本語の否定現象には、その他にも同じよう似ていないもの、異なるよう類似の現象が多くある。更なる考察が必要なものも多いが、否定的要素の領域としてのスコープという統語的観点から見ると類似・相違点がより浮かび上がって把握できる。

5.1. 否定辞の脱落

本来あるべき否定辞が現れない場合がスペイン語にも日本語にも見られる。否定辞の脱落として一見同じ現象のように見えるが、実は根本的に異なっている。

3.2.2で紹介したように、スペイン語NSEは前置された場合否定辞が脱落する項目がある。ただし、否定辞が脱落してもその文そのものは否定力を持ち続け、否定辞が存在する時と同様の全称否定解釈を導く。

- (40) a. Nadie vino. ((25b)) (NGLE: 48.3e)
b. No he estado aquí en {mi/la} vida. ((26a))
c. En {mi/la vida} he estado aquí. ((26b)) (Bosque (1980: C. 2), (27b), (28b))

抽象的否定要素が存在するか、あるいはこれらのNSEが否定力を持つかは更なる議論が必要であるが、文の否定文としての意味特質は維持される。

一方日本語では、NSEが否定辞なしでも生起する場合、本来の意味のまま肯定表現として用いられ否定的意味を成さない場合と、否定辞とともに成していた意味を否定辞なしで表すが、文全体としては肯定文を成す場合がある。

- (41) もとの意味のまま肯定文で用いられる項目
- a. 昨日の野球の試合は、まったく素晴らしかった。
 - b. この映画、全然よかったよー。
- (42) 否定辞とともに成していた意味を、否定辞無しで成す項目
- a. つい、何気に言ってしまった。(「何気なく」の意味で)
 - b. あいつはいつもろくなことばかり言っている。(「ろくでもない」の意味で)

これらはもはやNSEではなく、独立の意味を持つ語として語彙化したものと見なすべきであろう。否定辞が脱落しても文が否定力を持ち得るかどうかという点で両言語は大きく異なる。否定辞が脱落すると、少なくとも日本語では文否定力は維持できない。

5.2. 虚辞の否定辞

5.1では本来あるべき否定辞がなく否定辞がないのに否定の意味を成す場合を見たが、否定辞があるのに否定の意味を成さない場合もある。特にスペイン語には多く観察される。

- (43) a. No nos iremos hasta que no nos digan la verdad. (NGLE: 48.11b)
not will-go-1st-pl till that not us would-say-3rd-pl the truth
'We will not go till they tell us the truth.'
- b. Trabaja mejor ella {que él ~ que no él}. (NGLE: 48.11d)
work-3rd-sg better she {than he ~ than *not* he}
'She works better than he.'

日本語では、否定辞があるのに意味を成さない場合はほとんどない。(44)cのように誤用が転化したと思われる場合だけであるが、否定辞があるのに意味を成さない例として(45)を挙げておく。

- (44) a. 君が本当のことを言うまでは/*言わないまでは、私達は帰りません。
b. 君が本当のことを言わないうちは、私達は帰りません。
c. ??息子が寝ない前に家に帰ってあげたい。
- (45) 負けず嫌い (Cf. 食わず嫌い)

5.3 否定辞繰上げ

本来従属節にあると思われる否定辞が主節に現れる場合を否定辞繰上げ (Neg-raising) と呼び、NSEによっては生起が許される項目もある。

- (46) a. [Neg(no) ... [s ... A ...]]
 b. [[s ... A ...] V-Neg(-nai)]] (S は節境界)
- (47) No creo que llegue hast las seis. (NGLE 48.12c)
 not believe-1st-sg that would:arrive-3rd-sg till the three o'clock
 'I don't think he will come till three.'
- (48) a. 私は学生がだれも補講に来ると思わない。
 b. 私はろくな学生が補講に来ると思わない。
 c. *私は田中君が試験にしか来ると思わない。

いずれも否定辞が節境界を越えても NSE の存在を許すようなスコープを成すと見なすことができる。

5.4. 疑問文の返答

疑問文の返答の *si/no* は英語の *yes/no* と同様、後続する命題が肯定命題であれば *si* が、否定命題が後続すれば *no* が用いられる。一方日本語の「はい・いいえ」は相手の発話に同意するか否かで使い分け、「いいえ」が否定命題と結びつくとは限らない。

- (49) A: ¿No vino María?
 not came-3rd-sg Mary
 B: No, no vino. / *Sí, no vino.
 No, not came-3rd-sg / *Yes, not came-3rd-sg
- (50) A: ¿No vino María?
 not came-3rd-sg Mary
 B: Sí, vino (María). / *No, vino (María).
 Yes, came-3rd-sg / *No, came-3rd-sg
- (51) A: Did not Mary come?
 B: No, she didn't. / *Yes, she didn't.
- (52) A: Did not Mary come?
 B: Yes, she did. / *No, she did.
- (53) A: 花子が来なかったの?
 B: はい、花子が来なかったんです。
- (54) A: 花子が来なかったの?
 B: いいえ、花子は来ました。

該当部分の文が肯定か否定かということと「はい・いいえ」の使用は無関係である。また前後の文脈さえ整えば、「はい」であっても NSE の生起を許すことを付け加えておきたい。

- (55) A: 大勢来りましたか?
 B: いいえ、花子しか。(Cf. いいえ、大勢来ませんでした。花子しか来ませんでした。)
- (56) A: あまり大勢来なかったの?
 B: はい、花子しか。(Cf. はい、大勢来ませんでした。花子しか来ませんでした。)

5.5. 否定要素と共起できない項目

最後に関連項目として否定と共起できない項目を挙げておく。

- (57) a. Hemos llegado ya.
have-1st-pl arrived yet 'We have arrived already.'
b. *No hemos llegado ya.
- (58) a. La película me ha gustado bastante.
the movie me have:enchanted-3rd-sg sufficiently 'I liked the movie a lot.'
b. *La película no me ha gustado bastante.
- (59) かなり、相当、きわめて、たいへん、いよいよ等「達成度」を表す副詞
a. 太郎はたいそう努力した。
b. *太郎はたいそう努力しなかった。

いずれも否定のスコープ内には生起できない、もしくはスコープ外であっても否定との共起が許されない項目と言える。

6. 結び

本稿では、共通の統語的枠組に基づいて、否定の統語的スコープという観点から、日本語とスペイン語の否定現象を対照させて紹介した。同じ枠組みで言語を記述することで、どの部分を共通と捉え、どの部分が個別特質かが多少なりとも明らかにできたと思う。言語間に見られる表層的な相違も、幾つかの普遍的原理（言語能力ゆえの構造構築上の特質等）と個別言語における語彙的・構造的な特質で捉えられるのである。

最後に両言語の類型論的相違とも言える点を述べておきたい。更なる考察や議論が必要な現象も多いが、概して言うと、スペイン語の否定辞は本来のスコープマーカとしての役割が強く、否定のスコープがある意味活発に発達している言語と言える。その生起に否定のスコープを必要とする否定極性項目が多種多様に存在し、逆にそれが否定のスコープの活性化も促し、結果として否定的な意味を担う要素でも否定のスコープの役割を持つようになったと言える。一方日本語の否定辞は、本来述語の一部であり、否定述語を成すことを第一とする。スコープマーカとしての役割は二の次であり、結果として本来の否定極性項目も多いとは言えない。またそれが逆に、否定的意味を担う要素が否定のスコープを担うよう転化することを強く促すこともないと考えられる。明らかでない点も多いが、更なる議論を今後の課題として、本稿の結びとする。

謝辞

本稿は、東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門『外国語と日本語との対照言語学的研究』第4回研究会（2011年7月16日）において発表させていただいた内容に基づく。参加者の皆様にこの場をお借りして御礼を申し上げる。

参考文献

- Bosque, Ignacio. 1980. *Sobre la Negación (On the negation)*. Madrid: Ediciones Cátedra, S. A.
- Chomsky, Noam. 1991. "Some Notes on Economy of Derivation and Representation." *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. Freidin, Robert (ed.) Cambridge: MIT Press.
- Fauconnier, Gilles. 1975. "Pragmatic Scales and Logical Structure." *Linguistic Inquiry*, 6- 3. 353-375.
- Haegeman, Liliane. 1995. *The Syntax of Negation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Horn, Laurence R. 2001. *A Natural History of Negation*. Stanford: CSLI Publications. Originally published in 1989. Chicago: University of Chicago Press.
- 片岡喜代子 2006『日本語否定文の構造：かき混ぜ文と否定呼応表現』くろしお出版 東京.
- 片岡喜代子 2007「Neg を c- 統御する不定語 + モ」『言語研究』 131, 77-113. 日本言語学会
- 片岡喜代子 2009「[N一人]と「Nが一人も」」KLS 29. *Proceedings of the Thirty-third Annual Meeting (June 7-8, 2008)*, 12-22. Kansai Linguistic Society.
- 片岡喜代子 2010a「否定極性と統語的条件」『否定と言語理論』加藤泰彦, 吉村あき子他編 118-140. 東京：開拓社
- 片岡喜代子 2010b「否定極性と統語的・意味的条件—日本語記述に基づくスペイン語否定現象再考—」HISPÁNICA 第54号 日本イスパニヤ学会 43-65.
- 片岡喜代子「言語の普遍的原理と個別特質 日本語とスペイン語の否定関連現象から」
- Kato, Yasuhiko. 1985. *Negative Sentences in Japanese*. Sophia Linguistica Working Papers in Linguistics 19. Tokyo: Sophia University.
- Klima, Edward S. 1964. "Negation in English." *The Structure of Language*. J. Fodor and J. Katz (eds.), 246-323. NJ: Prentice-Hall.
- Ladusaw, William. A. 1979. *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations*. New York and London: Garland Publishing, Inc.
- Laka, Itziar. 1990. *Negation in Syntax: On the Nature of Functional Categories and Projections*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Pollock, J.-Y. 1989. "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP." *Linguistic Inquiry*, 20-3, 365-424.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española. 2009. "La Negación." *Nueva gramática de la lengua española (NGLE)*, 48. 3631-3715. Madrid: Espasa.
- Reinhart, Tanya. 1976. *The Syntactic Domain of Anaphora*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Reinhart, Tanya. 1983. *Anaphora and Semantic Interpretation*. Chicago: The University of Chi-

cago.

Saito, Mamoru. 2003. "A Derivational Approach to the Interpretation of Scrambling Chains." *Lingua*, 113, 4-6, 481-518.

Takubo, Yukinori. 1985. "On the Scope of Negation and Question in Japanese." *Papers in Japanese Linguistics*, 10, 87-115.

Ueyama, Ayumi. 1998. *Two Types of Dependency*. Doctoral Dissertation, University of Southern California. Distributed by GSIL Publications, USC, Los Angeles.

Zagona, Karen. 2002. *The Syntax of Spanish*. Cambridge: The University Press.

Syntactic Analysis of Negation Phenomena in Japanese and Spanish

Kiyoko Kataoka

Kyushu University

There exist many languages in the world, showing differences with each other as well as various similarities. However it is reasonable to assume that some universal principles should be working in general, even with surface differences observed in different languages, especially for the cases related to some universal notions. It is widely accepted that negation is a universal category (Horn 1989), and the phenomena involving negation are generally observed. Given its universality, the surface differences should be derived from universal principles in language and general properties in negation, combined with language-particular/lexical properties. I show it by making use of neg(ation)-sensitive elements (NSE's) in two typologically different languages, Japanese and Spanish: the former is a so-called *head-final* language, while the latter is head-initial.

In general NSE's have been uniformly treated as negative polarity items (NPI's): syntactically they must be in the domain of Neg (Neg-c-command condition (Klima 1964)), and semantically they must be in the scope of negative element (Ladusaw 1979)). However it is already pointed out that not all NSE's must obey those conditions, and, as discussed in this work, Spanish NSE's cannot be treated uniformly.

Kataoka (2010a) argues based on the Japanese data that semantic properties of NSE determine its syntactic behavior, and that those items with pure negative polarity in the original sense of Fauconnier (1975) and Ladusaw (1979) —to refer to the polar point in the relevant scale to induce universal negation (UN) in the scope of negation— do obey the Neg-c-command condition. This work shows that the same applies to Spanish: pure NPI's must be in the Neg-domain to induce scale-reading and UN, but NSE's with no scale-reading, such as negative indefinites, can be outside the Neg-domain. Assuming the original concept of negative polarity and the syntactic scope of Neg in terms of c-command, their distributional differences in difference languages can be captured in the general framework.